

## 書籍の紹介



# ポアンカレの「科学と仮説」

Poincare's "Science and Hypothesis"

中部大学工学部 佐藤 元泰

Chubu University, Motoyasu Sato

〒487-0025 愛知県春日井市松本町 1200

e-mail: satomoto@isc.chubu.ac.jp

私も日本人だから無常観をもっている。電磁波加熱というのは、無常観とは全く別の世界の筈だった。ポアンカレの「科学と仮説」(岩波文庫)に出会うまでは。

中学校で、科学の論理性と無謬性は一体のものであると教わった。理科でも社会科でも、時には国語でも科学の進歩は人類の必然の結果である。1960年代の若者は、やがてマルクス主義への信奉、この正義感が革命思想へと誘っていった。このストーンと落ちるようで、無機質性ゆえの空虚。そして、70年安保。初めはひとなみに革命学生を真、機動隊を悪代官と決めていた。彼ら学生の内ゲバは何なのか、真理は解釈によって生まれるのかと云う矛盾に呆然とした。

閑話休題、私は、中学2年のときに入院三ヶ月、膝上まで重いギプスでがっちり固定されていた。鉄枠ベッドの右にはいつも「動物記」があった。シートンは「力は正義なり」と云う脈々と受け継がれたアメリカの銃と、野生に生き物の美しさを断ち切ることに喜びを見出すことへのアンチテーゼを訴えた。ロッキーの美しむ自然、その中の孤高の生、「灰色熊の伝記」を毎日、一回は読んだ。主人公のワープは子熊時代、優しかった母を撃ち倒され、自分はパーンと云う音を後ろに、激痛と共に逃げのびた。足の不自由な小熊を誰も守ってくれない。小さな黒熊にも追われ、追われて必死に生きる。僕だって学校に行けない、授業にも、……。やがて、彼は大きな灰色熊になり、ロッキー山脈の主となる。誰とも馴染まぬ孤高の大熊は、涌く谷間の温泉に、痛む足を引きずって這い入ってゆく。危険なガスは老いた熊を懐に抱いていく。孤高の王者の死。作者のシートンは、猟師から足を洗って、米国初の自然保護運動家となり、ボーイスカウトを設立した人だ。動けず、もう歩けないかもしれないという不安、矮小な自分が情けなかった。先ずは、ロッキー山脈の猟師のつもりで、松葉杖をライフルに構え、病室の窓からノラネコを狙う。相手は小馬鹿にして振り向きもしない。ああ無情、ロッキーは遠かったのである。

無為な青春は過ぎて、何のためらいもなく工学部に入った。機械工学科だったが、一般

力学、材料力学、流体力学と代数学と、本当は、一つにまとめて欲しいほど、よく似通った式と課題と試験。大学も特別新しいことを教えてはくれないので部活に励む。これも昔ながらの先輩後輩の学連魂。一番社会に出てから役立った筈。

熱力学は違っていた。エントロピーと不可逆過程なる摩訶不可思議な概念に出合ったのである。科学、工学は決定論で全て表されるのではなかったのだろうか。何故、自然界はマックスウエルボルツマン分布なる不思議な統計がまかり通るのか？ 不可逆性は、生死観とも矛盾無く、受け容れられる筈であるのに、現代の決定論では、真の説明はできない。

そのころ、なにげなく手にしたのが、ポアンカレの「科学と仮説」だった。爾来、灰色熊に代わって、私の座右の書になった。難解で、何度読んでも本を閉じたらメモリーもきれいに消えた。これでは、催眠導入書で、赤面の至りなのだが、さる12月に、伊藤邦武先生の手になる新訳版がでた。最初のページからすんなりと読み進められたのだ。何故だろう？ たとえば、第2章65ページ「もし我々が一本の線を心に描こうとするなら、それは物理的連続体の色々な特性を伴ったものにならざるをえないであろう。つまり其の……、人がこうした荒っぽい像でよしとするなら、……そこに共通の部分が得られることは明らかである。ところが、純数学者は……」と云う記述で、本書の神髄への入口へ、すんなりと導いて下さる。あたかもポアンカレ氏が、100年を経て語りかけている様な錯覚を覚える。これはもはや、訳本ではない。今、日本人のフランス文明感も拡がり、その聴衆に、伊藤先生が その深い洞察と原著への共鳴を胸に、ポアンカレといっしょに演壇に立っておられると云う現実なのである。

ポアンカレの時代、物理学は、量子化に向かって進んでいった。しかし、それは極限としての科学ではあっても、多粒子系の持つ多様性と、回帰性を解き明かしてはいない。これから、マイクロ波を使ってGHz帯の電磁波と物質の関係を解いて行こうと云う、若い方々には、一度でいいから、科学と仮説を読んで戴きたいし、シュレーディンガーの「生命とは何か」等、この時代に書かれた啓蒙書にも手を伸ばすことをお薦めしたい。と、もと体育会の爺さんが言っています。